デンマーク留学体験記

木 下　千 絵

○留学 3 日目で…

私は 2007 年 1 月から 2007 年 12 月の約 1 年間、デンマークにあるエグモントホイスコーレン（以下エグモント）という学校に留学していた。エグモントは、デンマーク第二の都市オーフスから車で約 1 時間の場所にある。周りは自然に囲まれ、海まで徒歩 5 分であった。私は先天性の脊髄の障害を持っており、常時車いすを使い生活をしている。そのこともあり、福祉、特に障害者分野における福祉に関心があった。そのため、留学当初の目的は、「福祉先進国と呼ばれているデンマークの福祉、特に障害者分野における福祉について学ぶ」というものであった。しかし、私のこの当初の目的は留学早々に覆されることとなった。

エグモントでは生徒の 9 割がデンマーク人であるが、残りの 1 割は他の国からの留学生である。ガーナ、ウガンダから来ているアフリカ人、ポーランドやチェコ、スロバキアから来ている東ヨーロッパ人に加え私たち日本人の学生 5 人がいた。10 年前から日本人の学生を受け入れるようになっており、そのときから日本人教師の豊がエグモントで働いている。彼は、日本人学生のためにデンマークの福祉や文化に関する授業を行うほか、倫理学や太極拳の授業も担当している。

学校が始まって 3 日目に豊と進路について話す時間があった。先ほど述べたような留学目的を豊に話すと「とても優等生的な答えだか、本当に自分がしたいことはなんなのか、障害者という枠組みにとらわれず、一人の 22 歳の人間として考えてみた方が良い」といわれた。デンマークの福祉、障害者福祉を勉強したいと思っていた私は、豊のこの指摘にとても戸惑った。そこから、「なぜ、自分が障害者福祉を勉強したいのか、本当に自分がしたいことはなにか」を考えるようになる。この課題は 1 年間の留学期間中の大きなテーマとなった。

エグモントはデンマークに約 80 校あるフォルケホイスコーレ（国民高等学校、以下フォルケ）の一つである。18 歳以上ならだれでも入学でき、試験などもない全寮制の学校であり、もともとは農民のために作られた学校である。現在は集団生活を通して社会性を身に付けることや、高校卒業後進学を前に自分を試す場所として位置づけられているように私は感じた。実際に音楽やスポーツを学校の特色としているフォルケもあり、体験することに重きを置いている。私が入学したエグモントが他のフォルケと違っているのは、生徒の半数が何らかの障害を抱えており、またそれ以外の生徒のほとんどが、

障害を持つ学生のヘルパー（以下ヘルパー学生）をしているという点である。

○「スーパーユーザー」の授業

エグモントにいる障害を持つ学生のほとんどが 18 歳から 20 代前半の若い人たちである。エグモントを卒業した後は自分でアパートを借りるなどして自立した生活を送りたいと思っている人も多い。デンマークには、障害を持つ当事者が直接雇用主となってヘルパーの介助を頼むというパーソナルアシスタント制度がある。自立した生活を送るために、このパーソナルアシスタント制度を使いたいと思っている学生もいる。しかし、そのためには、ヘルパーを募集・面接して採用することから始まり、勤務体制、給料などすべて自分で管理しなければいけない。パーソナルアシスタント制度を使いたいと思っている学生のために、エグモントでは「スーパーユーザー」という授業がある。

この授業はミケルとローネという二人の先生が担当している。二人とも、脳性まひの重度の障害のため、長年ヘルパーの介助を受けて生活している。今までに多くの経験を積んできた二人が、エグモントの若い学生のために、パーソナルアシスタント制度をどう使えばいいかを教えてくれる。私も、「デンマークの障害を持つ人のことが知りたい」という気持ちがあったのでこの授業を受講した。受講生は、卒業後すぐにパーソナルアシスタント制度を利用して生活したいと思っている人たちばかりなので、授業の内容はとても具体的なものばかりである。例えば、パーソナルアシスタント制度が法律のなかでどう位置づけられているか、条文の解釈の仕方などを学んだ上で具体的な事例を挙げ、それぞれの場合、自分ならどうするかを話し合った。この授業に限らず、デンマークで受けた授業はディスカッションがとても多く、自分の意見を聞かれる機会が頻繁にあった。

さて、ヘルパーを雇用する際には自分でその候補者を見つけなければいけない。新聞やホームページにヘルパー募集の広告を載せて見つけることが多いらしい。練習としてその広告を作ってみんなの前で発表したときのこと、自分の名前、住所、障害の程度、どんなときに介助が必要なのかを書くというのは大体予想できたが、自分の趣味や好きなこと、性格について書くことも大切だといわれてとても驚いた。長い時間生活を共にする介助者とは相性がとても大切である。そのため、広告のなかでも自分がどういうことが好きでどういうことが嫌いなのか、社交的なのか否かなど、自分がどういう人間なのかを具体的に伝えなくてはいけないと学んだ。広告を作る作業でもう一つ驚いたのは、一人ひとり好きなことがずいぶんと違っていたことである。例えば、電動車いすに乗っている筋ジストロフィーの男の子はサッカーが好きで、電動車いすサッカーをやっていると書いていた。他にも映画が好きで実際に学校で映像の授業をとっている人もいた。みんな、自分のしたいこと、好きなことをちゃんと持っていて、それを周りの人にきちんと伝えることができていた。それに比べて私は、趣味など自分のことを書く欄で何を書けばいいのか分からず、広告をうまく作ることができなかった。この経験を通して、

自分のことについてあまりにも知らない自分に気付いた私は、愕然としたのだった。

〇憧れのローネ

デンマークに行ってたくさんの人と出会ったが、そのなかでも私の憧れの人物だったのは「スーパーユーザー」の授業を教えてくれていたローネである。ローネは夫と子どもとの三人暮らしで、学校の近くのとても可愛らしい家に住んでいた。ソーシャルワーカーの資格をもって福祉の分野で働く一方、劇団に所属して役者をやっていたり、本を出版したりと、アーティストとしての一面も持っていた。英語が上手く話せない私の話も根気よく聞いてくれ、授業中はいつも気に掛けてくれた。感情表現が豊かな彼女はいつも輝いて見えた。授業中に、ある日本人が「ご主人も子どももいて、仕事もしているあなたはとても幸せそうに見える。あなたのようになるには何が必要だと思いますか」と質問した。それに対し、「誤解しないでほしいのは、私のような生活をしていることが全ての人にとって幸せだとは限らないということ。障害のあるなしに関わらず、その人がその人らしく、その人の望むように生活できることが幸せなのよ」と話してくれた。ローネのように個性溢れるたくさんの障害者に出会うことで、自分は自分、他人は他人と割り切れるようにもなった。

〇たくさんの経験を通して気付いたこと

授業を受けるなかで、水泳や車椅子でもできるスポーツ、音楽やダンス、セーリングなど今までやったこともなかったことをたくさん経験した。今までは、自分には無理と勝手に決め付けていたり、やる機会がないものばかりだった。しかし、エグモントでは「とりあえずやってみる」という方針をとっており、できないことばかりに目を向けるのではなく、「どうやったらできるか」という積極的な発想が求められていた。それは、教師も、教師を手伝うアシスタントのみんなも同じである。そのような環境のなかで、私も自然と、何事にも積極的に関わっていこうと思えるようになった。さらに、私よりもはるかに重い障害を持つ学生がヘルパーの助けを借りながら海で楽しそうに泳いだり、障害を持つデンマーク人学生が何事にも果敢に挑戦していく姿を目の当たりにして、「とりあえずやってみる」のチャレンジ精神をいっそうかき立てられたのだった。

こうしてたくさんの経験を積むなかで、スポーツやダンスなど身体を動かすことが自分は好きなのだとわかったし、陶芸やガラス細工などの繊細な作業は自分には向いてないということもわかった。

デンマーク人のなかに一人でいるときに、デンマーク語が分からない私は周囲の会話に入れないことも多かった。諦めてその場から去ることもできたが、会話に耳を傾け少しでもデンマーク語を理解しようと努力した。また、賑やかなことが好きなデンマーク人とお酒を飲み、ダンスを踊る機会もたくさんあった。そんなときも、何の抵抗もなく一緒に楽しむことができ、どこにでも適応できる性格であることがわかった。このよう

に、この留学を通して自分では気付いていなかった自分の一面を知ることができた。それは、今まで書いてきたように異文化のなかで多様な人々と集団生活を送ってきたからだと思う。他の人から自分の性格について指摘してもらうこともあったし、また、他の人の行動や発言を介して自分のことを理解し直す場合も多かった。他人が自分の鏡となり相手を通して自分が見えてくるのだ。

○「とりあえずやってみる」という精神

先にも書いたように、エグモントでは「とりあえずやってみる」の方針をとっている。これは、授業のときにでもそれ以外の時間でもそうだ。例えばこんなエピソードがあった。

春休みに友達のアネという子のアパートに遊びに行ったときのことである。その日はエグモントの生徒が 20 人ほどアネの家に集まってパーティを開いたあとで、みんなで近くのディスコに行こうということになった。アネから「他のみんなはディスコに行くのだけど、千絵はどうしたい？」と聞かれ、「デンマークのディスコにはまだ行ったことがないので行ってみたい！」と即答した。アネは「わかったわ。ディスコには階段があるのだけど、どうにかするから」と明るくいった。私は「階段といっても精々４～５段ぐらいのものかな」と思っていた。しかし、実際に行ってみると途中に踊り場があるかなり長い階段だった。私の友人たちは相談し、車いすと私をみんなで抱きかかえて店の中に入れてくれた。私が、その店の階段のことを事前に知っていたらきっとあっさり諦めていただろう。しかし、アネを始めとするデンマーク人たちは、まず私の意志を聞いてくれ、その後に「とりあえずやってみよう、できなければ別の方法を考えよう」といってくれた。この発想は、やる前からあきらめることが多かった私にとってはとても新鮮に感じられたのだった。

○自分のペースですすむデンマーク人

他の国の人と話していると「デンマーク人はとてもリラックスしているよね」といわれることがよくある。デンマーク人自身も「自分たちはリラックスし過ぎている」と話していた。修学旅行でスペインに行ったときに、バスを停めて目的地まで歩いて行ったことがある。とても長い距離だったが、私をはじめ日本人学生は先頭に立ち目的地までひたすら歩いていた。ふと振り返るとデンマーク人の何人かがいないことに気付く。慌てて確認すると、その学生たちは途中のカフェでお茶を飲んでいた。「疲れたんだよ、千絵もお茶したら？」といわれ呆気にとられた経験があるくらいだ。

エグモントでも、授業と授業の間の休憩は 30 分あり、昼休みは 1 時間半だった。また、春休み、秋休みもあり 1 週間休みがあった。日本にいるときよりも自由な時間がたくさんあったことは事実である。たくさんの人と出会い、お茶をしたり、時にはお酒を飲みながらたくさんのことを語り合った。また、ゆったりとした時間のなかで「自分が

本当にしたいことは何なのか」をじっくりと考えることができた。このことにより留学当初、狭い視野で障害者、福祉についてこだわっていたことから解放され、エグモントの方針のとおり、とりあえずやってみるということが実践できていくようになった。このことは１年間の留学で得た大きなものとなった。

〇デンマークで得たもの、そして帰国後の私

１年間異国で生活し、悩んだり辛い思いすることもあった。特に、英語もデンマーク語もうまく話せない私にとって言葉の壁は厚かった。相手のいっていることがわからないし、自分の言いたいこともうまく伝えられない。周囲の人ともっと話したいのに、上手くいかないという悩みはいつも付きまとった。そんな悩みが積み重なり、誰とも話したくないと思った時期もあった。他者との関係で悩むことが多かったが、その悩みから救ってくれたのも他者との関わりであった。例えば、ジェスチャーや絵を書いて必死で自分の言いたいことを伝え、相手が理解してくれた瞬間や、発語ができない障害を持つ学生と文字盤を使って会話できた瞬間などである。他者との関係のなかで悩むことが多かったが、自分が元気をもらうのも他者との関わりのなかでであった。この留学を通して、自分は人と話すこと、人と関わることが本当に好きなのだということがわかった。人と関わることで、元気をもらうことができる。このことは留学当初からの「なぜ、障害者福祉を勉強したいのか、本当に自分がしたいことはなにか」という問いに対する一つの答えのような気がする。人と関わることが好きな私にとって、福祉という分野を選んだのはある意味で自然なことのように今は思える。このように、自分の原点を考えさせられた１年間の留学であった。

そしてついに 12 月に帰国した。現在、日本での生活も 1 ヶ月を経過している。帰国して間もないということもあり、デンマークと日本の違いに驚き、今までには見えなかった日本の不思議さを感じている。例えば、久しぶりに友達に会ったときのことである。私の友達のほとんどが就職しており、友達の悩みといえば、職場のこと、給料のこと、結婚をいつするかなどであった。

一方、デンマークでの私の悩みといえば、自分がしたいことは何なのか、共同生活のなかで他人とどう一緒に生きていくかというものであった。自分自身のこと、生き方を悩まず、人生のイベントの就職、結婚で悩むことに違和感を覚えた。いろいろな価値観があっていいこと、それを認めていくこともデンマークで学んだことの一つだが、実際に周りとの違いに戸惑うことも多い。しかし、これもデンマークに行ったからこそ感じられることである。もし、デンマークに行かなかったら自分自身について考えることも一生なかったかもしれない。自分には周りの環境に適応できる能力があること、人と話すこと、人と関わることが好きだということも気付かなかっただろう。現在は、デンマークでの体験を一人でも多くの人に話し、一緒に様々なことを考えたいと思っている。そして、私は日本でこれからも、私自身のこと、どう生きるか、どう他人と共同してやっ

ていくかを悩み続けるであろう。こう考えるときに、エグモントの校長オーレが、学期の最後に海外からの生徒の前でいった言葉を思い出す。オーレは、「デンマークにはまだまだたくさんの問題がある。それを解決するために、悩み、話し合うことを続けている」といっていた。安易に答えを出すのではなく、たくさんの経験をし、多くのことを感じるなかで、悩みながら周りの人と一緒に考えることを続けていきたい。

＊今回の留学は、「スカンジナビア・ニッポン ササカワ財団」の助成を得て実現することができた。

（教育学部福祉社会コース４回生）